
この広い海の何処かに

大恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この広い海の何処かに

【Nコード】

N5926Z

【作者名】

大恵

【あらすじ】

皇女セリシアはリュクシュワナーデ帝国内で厄介な立場にあった。

大叔父である皇帝から視察という面倒ごとを押しつけられ、テクネー共和国へと送り出される。

そこで出会ったエランという女性は結核と少しばかり複雑な恋心を胸に抱いていた。

恋愛に憧憬を抱いていたセシリアは、エランに恋の協力を申し出る。しかしテクネー共和国は未だ革命の歪みから脱しておらず、エ

ランの思い人は反政府運動に加担していた。
さらには魔族の暗躍まで表面化し始める……

序章

序章

魔王は死んだ。

神には引導が渡された。

多くの勇者たちが血を流し、その命と引き替えに魔王はこの地を去った。

絶望から立ち直ろうとする人々により神の絶対的な拘束は否定された。

人を束縛するあらゆる物が消え失せていき、人は自らの可能性に全てを託し、超越できる自己に誇りを持った。

そして人は魔物たちにより破壊された五十年前の文明を再興し始めた。

魔王が滅んで三年としないうちに大陸を縦断していた鉄道が再興され、魔物に対抗するために都合良く残存していた絶対主義や封建制度が打倒されていき、次々と鳴り物入りで民主主義と共和制が民衆の手により確立される。

人類は平和と繁栄を手に入れた。

……そう語る者は、愚か者か偽善者か？

世界は未だ混乱を極めていた。

平和は停滞であり、繁栄は単なる肥大に過ぎないと言いたいのか、人は自ら人の世に戦乱を招く。

共和制の勢力を恐れる旧体制の帝国や王国は、これに対し攻撃を仕掛ける。しかし、強大な力を持つ大帝国も様々な問題を内包し、自壊の危うさをようやく回避しているのが状況であった。

怨差の対象が魔王から人へと代わり、力を合わせて戦っていた人

々が、己の義を示すため剣を合わせる。

魔族たちには効果のなかった銃や大砲が再開発され、砲煙弾雨が世界を削り、人の命を紙つぺらのように燃やし尽くしてしまう。

魔王は人の力を恐怖によって押さえていたのではないのか？

神は人の傲慢に戒めを与えていたのではないのだろうか？

肥大した時代は、早くも坂道を転がり始めていた。

＊

あたいが生まれた時から、黒煙は空へ昇っていた。

高い高い煙突から吐き出される煙は、残り少ない青い空を削り取っていく。街には煤煙と馬糞の臭いが漂い、舗装された道路は薄汚く染め上げられている。

ここがあたいの生きている場所。あたいが生きていく場所。

魔王軍の進行をうけることなく、繁栄を……惰性の停滞を続けたテクネー共和国。つい最近、革命で王様を殺した市民の民主主義国家。

だけどそれが良かったの？

だって見てごらんさいな。

裏路地には労働の疲れを癒すため、日の沈まぬうちから酒を浴びるように飲む男たちが溢れ、工場の排水によりドブのようになった川の水でボロの衣服を洗濯している。

日々の糧を手にするため、自らを切り売りして賃金を稼ぎ企業家を肥えさせる。

これが魔王軍の進撃から間逃れ、世界に誇る人類文明の先覚者たち？

そんなことはない。だってこの世界は自分たち市民が作り出したもの。この社会体制こそ、私たちが望んでいたもの。それが五年もしないで理想の闇を生み出している。

いつだって敗者いる。いつだって人のやることにケチをつけたがる。それが今のあたい。

あたいは国営工場の帰り道、こんなことばかりを考えている。余ほど、この街が嫌いなのだろう。

視線を落として、自分の手のひらを眺める。

十本の指は細かい傷が刻まれ、その傷と掌の皺には油が染み込んでいる。

喘息の兆候か、胸も疼くように痛いし咳も多い。

戦乱により両親を失い僅かばかりの財産も失い、残るはこの身一つといえどもあたいは誇りを失いたくない。ただ少し疲れている。

それだけ……。

ただ、それだけのはず。

そんな胸懷を抱え長い影を引きずり、煤で薄汚れた建物の合間に作られた酷く雑な舗装路を進む。

いつもと変わらない帰り道。……でも、今日は違った。

いつもと変わらない汚れた道。その真中に、十二歳くらいの可愛いらしい少女が不釣り合いにも立っていた。まるで買ったばかりの高級人形を、道の上に立たせたかのように不自然に……。

瞳には翡翠。髪には細い金糸。肌には白磁。少女はそれらによって造られたと思えるほど光り輝き、身に纏うシルクのドレスには一点の汚れも無い。

少女は呆然とするあたいに微笑みかけ、ついて来るようにと手招きをする。

あたいがその手招きに誘われると、少女は踵を返して裏路地へと向かった。少し足を速めると、少女は小走りで先を急ぐ。頭はこの異常さに気づいて「止まれ」と命令する。でも、心が「追いかけて」とあたいに訴えかける。

あたいの呼吸が乱れ始めたころ、少女は裏路地の一画に足を止め

て振りかえる。彼女の足元で、一人の男が壁を背にして座り込んでいた。元は白かったのであろう黄ばんだシャツを着て、破れた作業ズボンを履いた足をだらしなく投げ出している。

その男の顔を見下ろし、あたいは息を飲んだ。

「……こんなっ！こんな事って」

運命の流れから、こぼれた落ちた雫のように彼はそこに倒れていた。

いつも近くにいたのに、いつのまにか離れていき、いつのまにか見失っていた人が……。

あたいは歓喜した。

どうして彼のところに案内したのか、少女に尋ねようとしたが姿が無い。幻のように消え去ってしまった。あたいは彼まで消えてしまうのではないのかと不安になる。

「エ……エラン？」

彼は光の無い瞳であたいを見上げ、あたいの名前を呟く。

夢ではないと確信し、止めど無く涙が溢れてきた。

この両手を開き、胸に抱ける分の幸福。

あたいはそれを拾い上げることができた……。

第二章 1 銀月の魔女

第一章 銀月の魔女

「テクネー共和国へ視察？」

ボクは跪いたまま面を上げた。視線の先には皇帝の玉座があり、そこに蹲踞した大叔父様がボクに視察の旅を命じた。

ここはリュクシュワナーデ帝国の帝都ヴァイシェシーカ。その中心に位置する宮廷の重要な一室。謁見の間で、ボクは皇帝である大叔父様の命を受けていた。

皇帝フレリック・ブレスウエイト。大叔父といってもまだ二十九歳。

弱冠二十七歳にして、大帝國リュクシュワナーデの皇帝となった人だ。前皇帝正妻の弟ではあるが、彼自身を皇帝の血縁として調べると、数代前まで遡らなくてはならない。場合によっては、公爵の一人に終わるかもしれない彼を、様々な事変が彼を皇帝の座へと押し上げたのだ。

それに至るまで、ボクの兄である皇太子と、前皇帝の幼い私生児が犠牲となっている。

誰が、どうして犠牲にしたかが問題ではない。ただ、事実として犠牲にしたのだ。

だから、ボクは大叔父様を好きじゃない。

でも、嫌いな要素は見当たらない。

天才肌で芸術を好み、神経質で野望など似合わない皇帝。

そんな大叔父様は、殊更大げさに頷いた。

「そう、視察だ。テクネー共和国の紡績工場と国営工場の視察をし

てきてもらう。もうすぐ十五となり、成人するそなたにとって実りある旅となる。いずれ余の側で大事な官僚職務をそなたには担ってもらうつもりだ。よって、今のうちに世界をその目で学びとってもらいたい」

流石は、一通りの帝王学を叩きこまれた男である。皇帝としての立ち振る舞いと、権力者の有無を言わせない物言いが身についている。すでに、ボクが視察に行くことになっているようだ。

テクネー共和国は五年前、市民革命によって封建的な王政から、民主的な共和制へと立ち代った新興国で、旧王族はことごとくギロチンの露と消えている。

その後、亡命貴族による王権復古や貴族共和政などの政治活動が行われたが、すべて革命政府の実力行使によって防がれている。

つまり、王政などよりはるかに中央集権的で、皇帝の権力が無制限、無制約で至上的、そして国民の権利など認めていない絶対君主制であるボクたちの国は、テクネー共和国にとって古臭くて忌むべき存在に過ぎないはずだ。

まして、皇帝一族の末席に名を連ねるボクが視察などで訪れれば、国土を汚す血族と疎まれるはずだ。極一部の急進過激派の人たちが国際問題になることを省みず暴徒となって、ボクをギロチンの前へ引き出そうとするかもしれない。

「しかし、知ってのように彼の国は我々のような権力の権化を毛嫌いしている。余はそなたの身分を隠して送り出したい。ならば、事を荒立てることもなく、また、向こうでの行動も比較的に自由なものなる」

大叔父様は、一通りの説明と言い訳を済ませた。

まあ、つまり……大叔父様には策略があるわけだ。

たしかに、テクネーは一見の価値がある。特に、リュクシュワナ

ーデ帝国を含め、諸国が魔族の進行によって失った五十年前の技術を数多く残しているテクネーは、千金……いや、億金の価値である。奪えるとなれば殊更だ。

考えられるに、ボクが不慣れなテクネー共和国で、しくじり起こせばよし。もっとも良いシナリオは、新政府の一派によって殺されてしまう。でなければ、そういうことにして、無用に騒ぎ立てる事であろうテクネー共和国に宣戦を布告する題材とする。

なにしろ、テクネーは先日まで隣国のタレス共和国と交戦していた。それは豊かな工業資産による資本主義化により、隣国の消費を取り入れるための戦争だ。国土を広げる帝国主義ではなく、市場を広げる工業国ならではの帝国主義。国家運営は錯綜して相違を示しているながら、根では繋がっている。

そして、大叔父様がテクネーとの国境付近に、あからさまではないが兵力を集中し、共和国へ幾人もの間者を放っていることはすでにボクの耳に届いている。

ともかく、大叔父様は何事もなく、ボクが帰ってくることを望んでいない。だから……

「ありがとうございます」

と、ボクは大叔父様の申し出を受け入れた。

この場で深く考えても仕方がない。ボクは無為に時間を過ごすのが嫌いだ。

ボクは今まで、大叔父様の目から遠ざかるため、国内を旅していた。もちろん、物見遊山ではない。

大叔父様の策略を逆に利用するくらいの下準備くらいは済ませている。

ボクを女と思って軽んじているなら、それなりの代償を払ってもらう。この計画のために要した要員と費用くらい安いだろう。

そう、ボクは女……女の子だ。

ボクの名はセシリア・エンゼルハート。魔王を倒した九英雄の一人。

人々は可愛いボクを、よりもよって『銀月の魔女』と呼ぶ。
歴代皇帝一族の中で、もっとも神を恐れぬと……。

＊

緑の黒髪を後ろで結い上げた少女が、外洋汽船のタラップを降りた。

頭上には数羽のカモメが飛び交い、少女は視線を冷たく青い海からテクネー共和国名物と言われる灰色の空へと向ける。

汽船が停泊するドックには水がない。なぜならば、ここは停泊した後、水を抜くドライドックという整備施設だからだ。

積み上げられたのレンガが排水量五千トンを越す船を包み込み、数十名の補修人員が船底の周りで作業を行っている。少女は柔らく滑らかな唇をきつく閉じ、子猫のように可愛らしく釣り上がった銀色の瞳で施設の様子を眺めていた。

絵筆でさりと引いたように直線的な彼女の眉には冷たさと威圧感が強く現れ、落ち着いた立ち振る舞いと相俟って、勇士的な凛々しさが溢れていた。

しかし、それより肉体的幼さが目立ち、彼女の表情に注意を払わなければ歳相応の可愛らしい少女にしか見えない。

とはいえ、身に纏う衣服は少し異様だ。男物で身を包み、腰には帝国陸軍が使用する儀礼用の短剣を下げている。彼女の二重巻きは一般的なインバネスとは違い、前方の中心で布地を重ね、それを払えば両手の行動を妨げないように工夫されている軍使用の製品だ。そして吐く息は白いというのに、短めのキュロットスカートから長く綺麗な両足を曝け出している。その脚線美とは対象的に、彼女の履いている軍靴はどうも無骨だ。

少女が風に靡く二重巻きを合わせ直していると、後ろに控えていた紳士が問いかけてきた。

「シルヴィア様。我がドライドックの設備はどうですか。東諸島会社の最新大型汽船も収容、修理できる事が一目瞭然でしょう。どうかお一つ、お父上に口利きを……」

少女の両親は、東諸島会社の大株主である。彼女自身も東諸島会社の株を持っているが、形だけの株主と言えるくらいで持ち株は少ない。

彼女の正体は、リュクシュワナーデ皇帝の計らいにより、テクネー共和国に視察へと訪れた皇女。『銀月の魔女』という二つ名を持つセシリア・エンゼルハートであった。

皇女という正式な身分は隠してシルヴィアと名乗っているが、彼女は施設視察のために両親の持つ力の一つを事実としてドライドックの会社に提示している。そのため、案内をしている男は、リュクシュワナーデ帝国の重商主義者を潤している東諸島会社の船舶乗入れ契約を受け取るため、年端もいかない少女を客人として扱っていた。

案内する男には媚びた様子はないが、機嫌を損ねないよう最大限の努力をしている。しかし、この国の男たちは気位が高く、このくらいでも彼にとっては十分な屈辱でもあった。

とはいえ、屈辱を甘んじて受けるのも、仕方の無いことかもしれない。

世界の陸地を三割も支配下に置き、東西の海路をほぼ全て有するリュクシュワナーデ帝国は、東諸島会社に様々な特許を与えている。航海と交易の独占。会社内の議会は、植民地の総督府設立から総督以下官僚の任命まで行える権利まで有していた。

このように東諸島会社は、商事会社の性格とリュクシュワナーデ帝国の植民地政策遂行機関であり、国策の権利と能力を有した半官国策会社である。

ドライドックの会社にとって、セシリアという少女は大事な外貨獲得の金づるであった。

「よい施設ですね。我が祖国にこのような大規模な民間施設はない。国営施設は総じて軍事施設が併設され、父上は港の使用には不平を洩らしていた」

「そうでしょうか。民間ならば実用的で無用な金策は必要ありませんし、何より政府の権威も届き難い」

それでは困るよ…と、セシリアは心の中で嘲笑する。

国の権限が届く範囲で、東諸島会社の運営は成り立つ。新興の共和制国家は当然にして、民間業者へ金を落とすのは半官会社としては論外の行為だ。

（たしか、このドライドック業者の株は、ほとんど旧体制下の貴族が持っていたはずだ。この国から逃げ延びた貴族は捨て値で株を売却しているっていうし…。苛烈な母上ならば、亡命貴族から株を買い取り、この業者を乗っ取るな。この人には可哀想だから、報告書は少し改竄しよう）

セシリアの胸に、妙な仏心に浮かぶ。

近隣諸国に梟雄と恐れられるが、何も優しさに無縁な少女ではない。

女の子らしく身を飾ることもあるし、花を目で動物と戯れるのが好きだ。双子の妹には優しく、そしてその妹を深く愛している。

しかし、時勢がそれを許さない。

セシリアは『強くなくてはいけない』と、常に自分へ言い聞かせている。

「では、資料をもとに報告書を纏めますので、今日はこれで失礼させていただきます」

「そうですか。お構いもしませんで…」

男の顔に解放されたと安堵する笑みが浮かぶ。少し高慢で鼻持ちならないセシリアと、二時間も付き合っていたのだ。プライドの高

い彼には、耐えがたい時間だったであろう。もつとも、我慢強く紳士の誓いを重んじる彼らには、良くあることである。

「では、お送りいたしましょう。施設内は意外と危険なところが……」

…と、そこで突如、爆発音が港に轟いた。

轟音とともに空気が震え、セシリアの柔らかい髪が小さく踊る。

肩を竦め案内役の男が、驚きながら周囲を見渡すと、ドライドック施設の片隅から白煙が舞い上がっていた。

「な、何事だっ！ ……あ、心配ありません。なんでもありませんよ」

男の説明はどことなく矛盾しているが、落ち着き払っているセシリアは気に止めない。

確認のためこの場を離れる男と入れ代わり、帝国軍服の女性がタラップを降りてきた。

「大事ありませんか？ セシリア様」

「ボクはシルヴィアだよ。パティ」

「そ、そうでした。申し訳ありません。シルヴィア様」

パティと呼ばれた女性は辺りを窺いながら訂正した。

彼女はパトリシア・セイローズ。セシリアの護衛を勤める銃士である。軽装の軍服で腰にはサーベルを佩き、テクネーからの輸入品である五連装リボルバー拳銃を帯びている。

癖の無いブロンドの髪を短く切りそろえ、清潔で明るい印象を与える女性だ。セシリア二つより年上で、去年帝国陸軍士官学校を卒業した。軍人には似合わないかもしれないが、セシリアは男爵家の末娘だった彼女の腕と頭脳に目をつけ、銃士に取りたてて側に置いている。

「この騒ぎは？」

「おそらく、資料にあった反政府団体の襲撃かと」

「反政府って、王政復古を掲げる貴族？」

パティは首を横に振って否定する。

「このような施設を襲うのは、産業の機械化を嫌う団体かと思いません」

「そんな団体があるの？」

セシリアは驚いて確認をした。

「はい。ラッダイトという小さな団体ですが、今は一番勢いがあり行動的です。市民の指示は二つに分かれていますけど」

「……産業の機械化を拒絶か。まるで……魔王みたいだ」

魔王とその眷属、魔族たちは人類の発展を嫌うかの如く、鉄道や工場などの施設を破壊し、何故か自分達に無力である銃や大砲までその対象とした。

まるで、人の発展を妨げるのが目的だったかのように、魔族の攻撃は執拗だった。

「その団体は、あとでブレンダンに調べてもらうか」

「セシ…、シルヴィア様。今回は……」

主人の気まぐれが始まるのではないかと、いつも振りまわされているパティは不安になった。

「分かっている。大人しくしてるよ。ボクが騒ぎを起こしたら国際問題だもんね。でも、テクネーの政治情勢は知っておくべきだと思うよ」

セシリアは適当な理由を作り、これからの日程を変更することを考えていた。と、その時、セシリアは首筋を舐めるような視線を感じた。それと同時に、腰の短剣が不自然な刃鳴りを立て始める。

震える短剣を押さえながら振り返ると、堤防の上で剣を持った男が突き刺すように見下ろしていた。

「魔剣使い……」

セシリアは厳しい目つきで、黒い剣を持った男を見上げた。

男は長身だが線が細く、身につけた服は見窄らしい木綿の作業着で、見たところの印象は貧弱だ。しかしながら、黒い剣を携えてセシリアを見下ろすその相貌は、弱き心を持つ者には畏怖を、強き心を持つ者には敵意を感じさせる鋭さが潜んでいた。

「襲撃者でしょうか？」

パティはセシリアを守るように前に立ち、男の挙動に注意した。セシリアと剣を持った男は厳しい眼差しで見つめ合っていたが、やがて男の後方より誰かが声をかける。

「クーランジュ。何をしている？ 撤収するぞ！」

太たく振り向いた男は、走り去る仲間を見送ると、再びセシリアを見下ろした。

「なにをしている。いくぞ」

再度促され、男はやっと仲間の後を追いかけた。

セシリアは男の姿が見えなくなるまで見送り、固唾を飲み込み込んだ。

「見つけたよ。『クライベイビー』だ……」

「そんな！……ふう、運が良いのか悪いのか。私には判断が及びません」

パティは諦めた様子で、肩を落とした。

「つまらない視察の旅かと思ったけど、まともな目的が出来たよ。運がいいね」

「シルヴィア様。ご無理をなさらず、ご自愛を。ただでさえ、皇帝派の者たちが何を仕掛けてくるか判らないのに」

主の身を案じて最低限の進言を口にしたが、セシリアが聞き入れてくれないことをパティは知っていた。

＊

「魔剣使いだと？」

髪の毛を全て剃り落としている男が、同様に剃り落としている眉を顰めて言った。

ここはテクネーの首都キュベルでもっとも格式高く、古くから各国の賓客を迎えているトゥールーズ・ホテル。セシリアは偽名を使い、このホテルの最上階に部屋を取っていた。

彼女の宿泊する一室は奢侈の一言に尽く。部屋数は九つに及び、室内に階段があつて二階まである。そのほか二つの浴室と三つのトイレ。果ては衣装部屋まである。

もはや、ホテルの一室とは呼べないほどだ。しかし、セシリアが正式に国賓として訪れた時の事を想像すれば、かなり抑え目の部屋だろう。

セシリアとパティのほかに、三人の男が護衛としてこの部屋の一階に泊まっていた。一人は席を外しており、今現在ここにいる男は二人である。

まず、先ほどの髪を剃り落としている男。

いささか装飾が華美なホテルの一室で、彼はふてぶてしく椅子に座り、皇女であるセシリアを前にして臆することも礼を尽くす事も無い。

彼の名はブレンダン。もっとも、本名なのかは誰にも分からない。国を捨て、傭兵として生きていくうち、いつの間にかそう名乗っているのだと彼は人に云う。傭兵としては三八歳と長老組で、彼の若いころを知るものが少ないため、いよいよ本名は謎となっている。

もはや時代遅れの金属製鎧に身を包み、腰にもまた古臭い幅広の剣をぶら提げている。短銃とサーベルが主流となっているテクネーでは、まるで博物館から抜け出た展示物のようだ。

そんな彼はセシリアの私兵として雇われ、彼女の護衛となって二年経つ。

「こんなところで魔剣とは珍しいな。嬢の魔剣が共鳴でもしたか？」
セシリアを『嬢』と呼び、端正な顔をわざわざ崩して、グラスの
モルトウィスキーを飲み干した。

「うん。それに使い手の腕もなかなかのものだと思う」

セシリアはそう言い、黒い髪を軽く掻きあげる。…と、そこから
髪の色が光り輝く銀色へと変わっていった。緑の黒髪はもう何処に
も無い。星空を背負ったような銀髪が、柔らかく流れている。まる
で魔法のように……いや、これは魔法である。

彼女は魔法使いであった。そして、同時に魔剣使いでもある。

魔族は基本的に不死である。魔族を倒しても滅ぼす事は出来ない
ので、最後のとどめに代わり、その力だけを抽出して剣に封じ込め
る。その剣の力を強い意思で扱う者たち……それを魔剣使いと呼ぶ。
そして同様に、魔法使いは魔族の力を魔法という不定形な形に変換
する業を学んだ者たちである。

帝国はそういった異形の力を持って魔族と戦い、そして植民地の
獲得にも利用してきた。魔法を使い、魔剣まで持つセシリアは、帝
国の持つエゴを凶らずも背負った存在かもしれない。

「ここは魔王の攻撃も手ぬるかったはずだ。魔剣を持った奴がいる
とは。どこかの国で生き残った兵士が流れてきたのか？」

部屋の真ん中に座り込んでいる容貌魁偉な男が口を開いた。

彼はアルファード・エイメルソン。ブレンダンと同じく傭兵であ
る。

二メートル二十センチを越す大男で、その身を包む鉄の全身鎧が
絨毯を傷つけるのも気にせず、直に座り込んでハムをかじっている。
荒く削った彫刻のように厳つい顔付きで気難しい印象を与えるが、
外見に似合わず陽気で女好き。何処か抜けていて、付き合ってみる
と親しみ易さがある。

そして、セシリアと共に魔王を倒した九英雄の一人でもあった。
「魔族を倒したことの無い奴が、魔剣なんて持っているわけが無い。流れ者か？」

基本的に、魔族がいなければ魔剣は作れないため、アルファードのいう推測も間違いではない。しかし、パティはそれを否定する。
「いいえ。流れ者ではないとおもいますよ。仲間からクーランジュと呼ばれていました。テクネー系の姓ですから」

「傭兵かも知れないぞ。ブレンダン知らないか？」
アルファードは、古強者でもあり傭兵仲間にも顔が広いブレンダンに訊いてみる

「他国の傭兵までは知らんよ。もっとも、名の有る魔剣使いなら知らないこともない。でも、やっぱり、そんな名前の奴は知らんな。今のところ思い当たる中では」

「気を持たせる言い方だね」

セシリアはブレンダンに期待していたので、煙に巻かれたのが不服とばかりに口元を少し曲げて見せた。

「偽名かも知れんだろ？通り名か、本名のフルネームでも分かれば別だが」

「それはブレンダンが調べてくれない？」

モルトウイスキーをグラスに注ぐ手が止まり、ブレンダンの舐めるような視線がセシリアの瞳に向けられる。

「本気で首を突っ込むつもりかい？嬢……」

「もちろん。なにしろ、魔剣クライベイビーに宿る魔族は危険だ。そして、どうやって手に入れたか気になる。あれは、ブラウンと共に失われたはずだ」

ブラウンとはセシリアたちと共に魔王と戦い犠牲となった九十五人、その内の一人だ。

そう。九英雄と呼ばれるセシリアたちは、ただの生き残りに過ぎな

い。多くの犠牲の末、魔王を倒したのだ。

「……セシリア様。視察のご予定はどうなさいますか？ 明日は国営紡績工場の視察となっておりますが？」

お堅いパティは予定が変わるのを嫌う。セシリアは彼女の能力は認めているが、柔軟性の無さと臨機応変の機知が足りないことを少し不満に思っていた。もっとも多面的に見た場合、彼女の能力は満足がいくほど優秀であるが。

「日程を伸ばせばいいだろう」

優しさが無い主人の返答を聞いて、パティは両手を胸の前で握り合わせて困惑した様子を見せた。

「……しかし、滞在費のほうが………」

「銀行に蓄えがある。ボクの秘密口座だ。バレたら母上に叱られるかもしれないけど」

「エリス様のお叱りはまだしも、出所のわからない金子を使えば、皇帝陛下が邪推を成されるかも知れませんよ？」

セシリアは母エリスのお仕置きの方が怖い。ところが当然、パティは皇帝との軋轢を恐れていた。

「反乱の資金だとしても？ はんっ！ あんなはした金じゃ、兵に食料を与えることもできないよ」

彼女はそう言うが、一般市民からすれば一生拝むことのできない財産のはずである。

「おおい、嬢。その話は俺たちが聞いていいのか？」

わざとらしく耳を塞いでいたブレンダンが、気まずそうに尋ねた。「キミたちは、このはした金で動くことになる。一蓮托生だよ」

アルファードが、同時に首を切り落とされる仕草をした。

「安心しろ。処分は裁判の判決のもとに行われる。公平な裁判なんざ受けられねえ俺たちは手枷足枷で金鉱の一生涯労働さ」

ブレンダンが気休めにならない言葉をかける。

「提案！ この謀反を密告して、減刑を求めるのはどうだ？」

「いやいや、これをタネに揺すりたかりってのも小悪党でいいな」

ブレンダンがニヒルな笑みを浮かべてアルファードに耳打ちする。

「だから、謀反のつもりはないって……………」

セシリアは困ったように呟くが、アルファードたちは聞いている様子が無い。

ブレンダンとアルファードが悪事の算段で盛り上がっていると、部屋のドアがノックされた。急に男たちの目に鋭さが現れるが、ノックの主が声をかけると緊張が解けた。

「僕だ。開けてくれ」

セシリアの雇った三人目の護衛だ。パティが部屋のドアを開けるため席を立つ。まず彼女は部屋の玄関に行かなくてはならない。

「おおい、大変だよ」

玄関を開けに行ったパティとともに、数部の新聞を持った青年が姿を現した。

青年の名はウィラード・ルーラー。親しい者からはウィルと呼ばれている。

栗毛色の髪を散切りにした童顔の美少年で、何処と無く爽やかな雰囲気を漂わせている。腰には業物の剣を下けているが、アルファードたちのように鎧は身につけておらず、活動的でラフな普段着だ。背が高く手足もスラリと長い。顔つきは優しく中性的だが、作りはさっぱりしていて、いやらしさがまったく無い。セシリアはふざけて化粧栄えする顔だと云うが、もちろん彼は遠慮している。

一見、剣の似合ぬ男のようだが、こと剣に関しては天賦の才を持つ。

生きながらに伝説となった剣聖が、たった二人だけ取った弟子の一人である。セシリアはそのもう一人の弟子だが、ウィラードと比

べると剣の才はかなり見劣りする。

さらに、ウィラードも魔王を倒した九英雄でもあった。

ここには魔王と戦い、そして生き残った九人の内の三人がいる。テクネー政府がその事実が付けば、国内は上を下への大騒ぎとなることだろう。

出入り口に一番近かったブレンダンが、ウィラードの持っていた新聞のひとつを抜き取って目を通した。

「これは……」

ブレンダンは洪面を浮かべた。

最初に目に飛び込んだのが、一面の目立つところに描かれた絵である。

下品な風刺画だった。

王族をギロチンにかけていた革命政府の役人が、何故か豊満な胸を露わに肌蹴てやって来る女性に驚きながらこう叫んでいる。

『うひーっ！本物の皇女がやってきたあ！』

役人はライフル銃を持っているのに、抜き身の魔剣を持って描かれる皇女を前にして震えあがり失禁している。稚拙で下品な風刺画だが、実情はよく表している。しかし、見るものに誤解を与えかねない。

見出しは『帝国の女傑がお忍びで国内に！』

内容は若干の偏向が有り、新政府とセシリアを面白可笑しく評している。

「……早いな。もう誰かが、ボクたちの視察情報を流したみたいだね」

「問題にするのはそれかよ」
偏向記事を読んだセシリアの感想がドライなので、ブレンダンは舌を巻いた。

「セシリアはこんなに胸がでかくないぞ？こっちが問題だ」

アルファードは、セシリア本人が軽く流した問題を口にする。

「新聞なんて、紙にインクを擦り付けただけの物だよ」

スレンダーなセシリアは、自然と胸を隠すような仕草をしていた。強がっているが気にしているのだろう。

「しかし、これでは嬢がまるで新政府へ抗議しにきたように思える。ただでさえ、この国は貴族などの旧支配階級をギロチンにかけたところだ。嬢の風当たりが強くなるぞ」

関連記事を読み終えたブレンダンが、紙面を叩きながら不安要素を述べた。無批判な専制政治から解放され、批判的な意見も世間を行き交うようになっていく。このため、読み手の読解力と良識が試される社会と言える。

情報は従来と違った意味でその重要性を増していた。

「ボク自身のことは、ばれてないみたいだけど、ボクの容姿は目立つからね。みんなは、ボクをセシリア、セシリアって呼ぶし…」

「悪かったよ、シ・ル・ヴィ・ア」

ブレンダンは新聞を投げ捨てて口元を不機嫌そうに歪める。

「それで、嬢って呼び方はいいか？」

「前からその呼び方は嫌だった。せめてお嬢様とでも呼んでよ」
ブレンダンは肩をすくめて苦笑した。

「それにもうひとつ！みんな、心構えは立派だけど、その鎧をやめ

てくれる？」

アルファードは面を食らった様子で、まず自分を指差した。

「一人」

次にブレンダンを差し、

「みんな……」

と、数を数えて見せた。

「細かい事はいいんだよ。とにかく、そのふ・た・り！ 少しはウィルを見習って！」

「いやいや、僕は、たんに鎧が壊れただけで……。セシリアも知っているだろう？」

ウィラードは困ったように頭を掻いて見せる。

「と・に・か・く！」

「なるほど。良く分かった。セシリアの言う通りだな」

アルファードは神妙に頷いて見せた。

「言っても分からない馬鹿だなあ。セシリアじゃなくて、シルヴィアだって」

「馬鹿って言うな！ 馬鹿はお前じゃあ！ ……だが確かに、この国では俺たちみたいな傭兵は目立つ。やはり、服を新調すべきだな」
何度も頷いて見せたアルファードは、ヌツと大きな手をセシリアの目の前に突き出した。

「金くれ」

「甘えるな！」

アルファードの差し出した手を叩く。

「さっそく、ホテル付きの仕立て屋にセシリアの名前で頼むか。靴もあつらえてもらって……」

「セシリアの名前で頼むな。シルヴィアだよ」

給料から天引きするつもりで、セシリアはアルファードを放っておくことにした。わざとらしく視線を窓辺に向けると、白い結晶が窓枠につきもり始めていた。

「雪？」

「ええっ！私、雪って始めてなんです」

パティが子供のようにはしゃぎ、窓辺に駆け寄った。

「雪か……。積もれば日程延長の言い訳になるね」

セシリアは綺麗な雪の到来を、とても現実的な見方でとらえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5926z/>

この広い海の何処かに

2011年12月19日21時58分発行